

## 南京大学派遣参加報告書

文学研究科フランス文学専修修士1年 李 玖如

中国が世界一のマーケットと言われるようになって久しい。と同時に中国の持つ地域格差・労働問題が日本をもおびやかす事例が後を絶たない。日本人は太平洋戦争以来、中国という国家に対しても、中国人に対しても決して同調することのない一定の距離を保ち続けてきた。日本人は中国人を恐れている。中国人だと言うとすこし相手の顔が引きつることがある。中国産の農産物という身構える。中国に旅行に行くと言うと、どこか危機感をもったような反応が友人から返ってくる。それは中国人とて同じことである。むしろ中国人は戦争で日本に侵略されるがままとなった経験から、依然として日本に対する潜在的な敵愾心がより強いといえる。中国に帰って親戚に会うたび、日本は面白みのない国だ、中国のほうがいい、と吹き込まれる。空港の税関の職員には意味ありげに、これからも日本に住み続けるつもりかと尋ねられる。そして私自身は日本で日本人と同じように生活するうちにいつしか、このどちら付かざるアイデンティティに窮屈さを感じていたかもしれない。はたして日本人は中国人の何に不信感をもっているのか。中国人の方は日本人のどこが気に入らないのか。それを探るべく今回南京に行ってきた。

結論に入る。日本人の方は中国人の荒々しさに怖気をふるっているのではないか。中国人は相手がどのような人物かは注意深く見ているが、相手にへりくだったり迎合したりすることがない。中国語に敬語表現がなく、婉曲語にあたるような同義語が少ないことが一因であろう。客も店員も、教師も生徒も自己主張の語彙が平等であり、その点では道行く人皆が対等の価値を持つ社会なのである。それだから日本での生活と比べると、自分が主役だと思えるような場面が少ない。中国人の方も習慣的に、こちらに主役を渡すということをしなない。日本人がそれを横柄と見るのも当然であろう。そして中国人はまさに同じ点での食い違いで、日本人のおとなしき、煮え切らない態度を齒がゆく思っている。私自身も中国ではもっと豪快になれだとか言われることのなんと多いことか。日本人は中国人にとっては、何を考えているかわからない扱いにくい人種なのである。しかしこの控えめな態度も日本人の美德であると考え。自己主張するだけでなく、他者の立場も考える、そういった態度があつてこそ秩序のある社会が成立するだろう。ただし中国人はきちんと人を見ている。話しぶり、容姿、態度などを鋭く観察して、初対面でもこちらがどういう人間か一定の評価を下してくる。南京で出会った人の中にもはじめの二言三言で「中国に住んだことがあるのか」「中国系の出自ではないのか」と遠からぬ判断を下す人が多かったものである。そうすると中国人は、皆が平等という考え方は変えぬままに、相手を思いやる態度も身につけることができるであろう。現に中国は変わりつつある。5年前であれば我先に扉に人が殺到していた地下鉄、今では「降りる人を先に、乗る人はあと。」とアナウンスがあり、それを守らない人を注意する人も現れた。街は清掃業者が定期的に掃き清め、テレビには「ゴミのポイ捨てはやめましょう」のコマーシャル。我が物顔に生きるのではなく、他人に対する思いやりをもち、皆にとって心地よい社会を作ろうとする意欲の表れである。中国人は日本の良いところを認めつつある。しかし日本人のほうは中国人の横柄さを恐れ、ただ中国を輸出入市場、観光客の生る木としか捉えていないのではないか。日本人に伝う。中国人はただ野蛮で横柄な人種ではない。むしろ日本人よりも人を見る眼を持っており、そして今に日本的な社会に近づこうとしている。それには何十年もかかるかもしれない。しかし今、日本人は中国人を恐れるのをやめる意識改革をしなくてはならない。中国が変わり、日本も変われば、両国の関係が良好になるとまではいかなくとも、少なくとも中国人と聞いて強ばったり、歩いてくる中国人観光客をよけて通ったりするようなことはなくなるであろう。両国人のいつそうの交流を願う。